

私のカルテ

No 4 1 7

だい ちよう けい しつ しよう

大腸憩室症について

津島市民病院 消化器内科医師

ひら いゆ こう すけ
平岩厚佑

はじめに

皆さんは大腸憩室という言葉を知ったことがありますか。大腸カメラやCTを受けたときに「憩室がありますね」と言われた方もいるかもしれません。

憩室とは消化管壁の一部が外側に向かって飛び出し、袋状の形になった状態のことを指します。近年大腸憩室の保有率は増加傾向にあると言われ、70歳以上では約3人に1人は大腸憩室が認められます。日本人では右側結腸(盲腸・上行結腸・横行結腸)に多いのですが、年齢を重ねるとともに左側結腸(下行結腸・S状結腸・直腸)に多くなります。

基本的には無症状のことが多いのですが、時には憩室を起点にトラブルを起こすことがあります。ここでは大腸憩室症の中の代表的な憩室出血、憩室炎について説明します。

憩室出血について

大腸憩室の壁には血管が通っていて、時々その血管が破れて出血することがあります。これを憩室出血といいます。

憩室出血の発症者数は近年増加傾向で、高齢者に多く、日本では男性に多い傾向があります。肥満は憩室出血のリスクとされています。

憩室出血の特徴は痛みは無いものの比較的大量の鮮血便を認めるということです。少量の出血であれば通院で治療を行うこともありますが、大量の出血で血圧が下がる場合や血液検査で貧血を認める場合、高齢者である、血液をサラサラにする薬を飲んでいて、出血持続期間が長い場合などには入院治療を勧めています。

憩室出血の自然止血率は70～90%とされているため、入院時は腸管を休める目的で絶食や点滴治療を行います。しかし患者さんの全身状態や他の疾患も疑われる時には、状況に応じて大腸カメラを行うこともあります。

大腸カメラにより出血している憩室を見つけた時には、クリップ(大きなポリープをとったときに傷口を閉じるために使用するもの)で直接血管が破れているところを閉じたり、出血している憩室をふさいだりして止血処置を行います。

再出血率は、1年後で約3割、2年後で約4割なので繰り返し返される方も多い病気です。

憩室炎について

大腸憩室に糞石などが詰まると内部で細菌が増殖し、憩室に炎症が生じます。これを憩室炎といいます。

60歳未満では右側結腸での憩室炎が多いのですが、より高齢者では左側結腸の憩室炎が多いとされています。喫煙は重症化のリスク、肥満は発症リスクを上げるとされています。

症状としては腹痛や発熱などがありますが、炎症が強いときには大腸と膀胱に通り道ができてしまい、尿に便が混じることもあります。症状が軽い時には通院で治療を行うこともありますが、炎症反応が高いなどの時には入院治療を勧めています。入院時は腸管を休める目的で絶食や抗菌薬などの点滴治療を行います。炎症が強くと大腸に穴が開いたときには外科の先生に相談し、緊急手術になることもあります。また炎症の繰り返しにより大腸が狭窄し、便が通りにくいなどの症状があるときには、外科の先生とも相談し、後日大腸切除を勧めることもあります。

おわりに

大腸憩室症について説明しました。

腹痛や血便をきたす病気は数多くあります。症状があれば、一度当院を受診してみてください。

